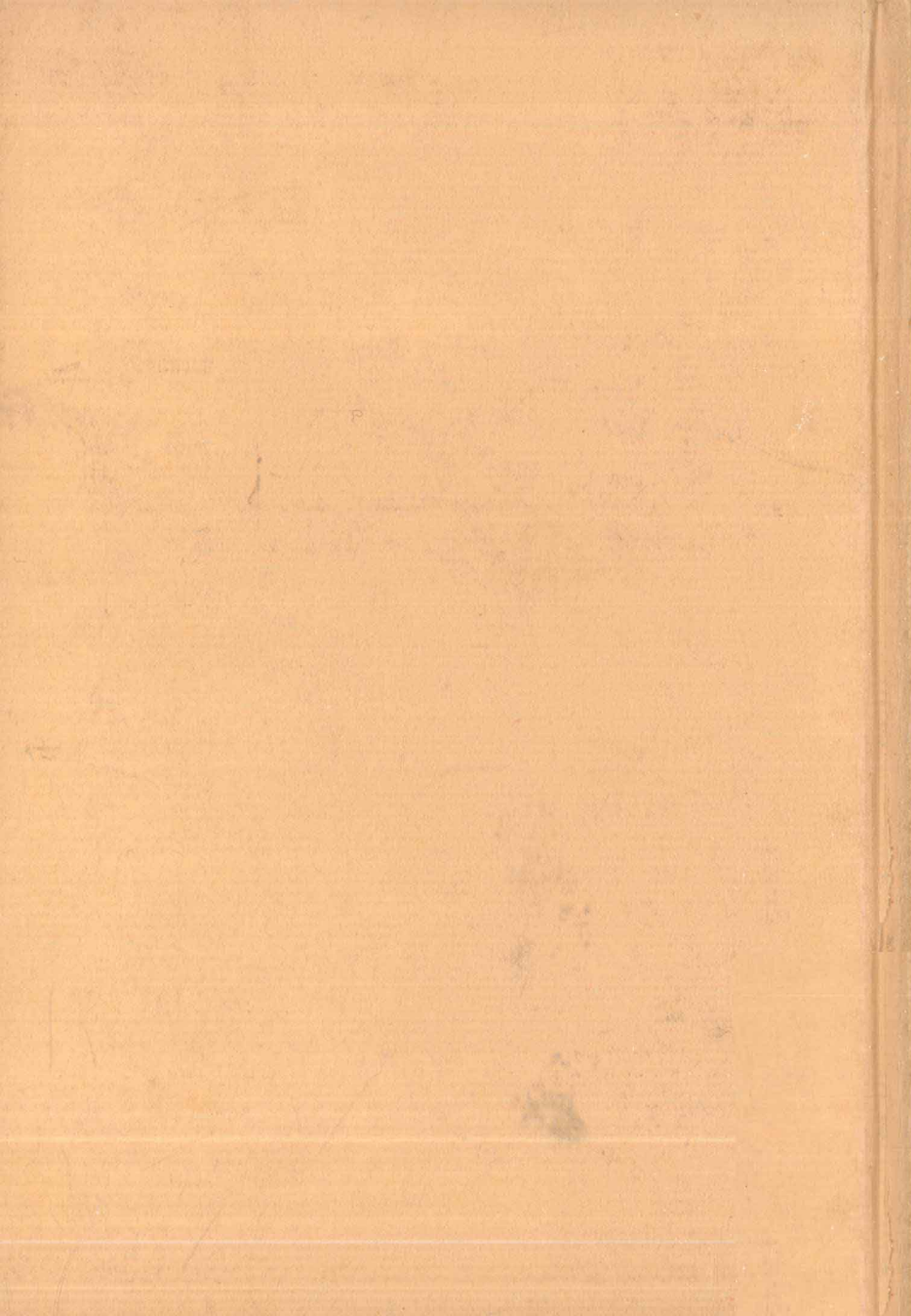




新 島

——工作者の伝説——

石 田 郁 夫

未 来 社 刊

新
島

一九六二年一月三〇日 第一刷発行

定価 三八〇円

著者 石田 郁夫

発行者 西谷 能雄

東京・文京・表町

発行所 株式会社 未来社

東京都文京区表町七番地

電話(八二)六六六(八二〇四四)

振替東京八七三八五番

検印廃止

乱丁・落丁本はおとりかえします。
(ふじ活版・萩原印刷・富士製本)

目次

新島の前衛 3

豚と風車 31

新島のゲリラ 65

姥捨てとマイカー

109

養豚作戦記 153

島の僻地 179

工作者の伝説 213

あとがき 237

新島の前衛



木藪でツクロイをしながらビケをする反対派のウンバアたち。向山ミサイル試験場に通ずる山道。（右端のウンバアは今年死んだ）

1

徳川幕府の初期から明治の始めまで、天与の牢獄として有用であったという自然的条件の苛烈さは、この島を遠望することだけでは実感できない。

切り立った断崖と素はだかの砂浜を四囲にめぐらした島のたたずまいを眼前にした時、海上の烈風の通路であり、黒潮のひた走る灘のただ中であるという外的条件と呼応して、この島の地形そのものが、外部との断絶に大きく作用していることに得心がいくのだ。

四肢を切断されて、その群れから疎外され、うずくまるけだもののように、この島は孤立しつづけて来た。例え流刑地としてであっても、封建の体制に島が丸ごと有用であった遠い月日の方が「近代」ほど酷薄ではなかったという想いがうずくのは、この島と日本帝国主義との再度の因果な切り結びのためだ。

日本の「近代化」から一貫して疎外されつづけてきたこの島は、太平洋戦争の末期「体制」に引きよせられた。首都防衛のための基地としてであった。東京湾口の南に点在する伊豆の島

島には幕末にも「黒船」に備えて「鉄砲場」を作ったが、まさに同じ戦略的要請によって、島は再び要塞化されたのだ。それは女子供を強制的に島外へ追い出し、男達を土民軍のように現地編成の警備隊に拉するという「占領」の形態をとった無残な帝国主義のわしづかみだった。

日本軍隊に荒しつくされた島を、島民たちは自力で再建することから戦後の出発をした。また、かつての孤立した日曆をめくらねばならなかった。ただ、敗戦により植民地を失った日本資本主義は、よぎなく国内の開発にいくらかの資本を投下し始めた。その一端としての離島振興法の、そのまたおこぼれで二〇メートルくらいの突堤が、数年がかりで黒根という、この島の角の鼻にきずかれた。

そしてまた、再起した日本帝国主義は、十数年前の怨恨が定着しているこの島へ踏みこんで来た。今度はミサイルの試射場として、島が有用になったのだ。だが、今度は事情がことになった。この前は一喝のもとに島をうばわれたが、今度は足かけ五年も拒否しつづけてきた。

……そして今日、私も乗った船には、反対派支援の新島共闘第三次オルグ団と賛成派支援の独立青年党の清水亘がひきいる右翼団体と乗り合わせ、文字通り呉越同舟だった。

「近代」へ向ってさしのべる「手」を欠いたこの島に「体制」が、からくもくくりつけた不細工な、貧弱な「義手」ともいえるべき突堤へ船は接岸した。

オルグ団の上陸阻止を企てる賛成派と、上陸掩護の反対派のたたかいは先ず、突堤の先端に

たむろした賛成派の行動隊である「愛郷青年連盟」の白カブトが、「赤犬かえれ」と怒号することによって開始された。

海から見て、突堤の附根の左側に反対派が、右に賛成派が、張り渡したロープと警官の列がつくった狭間に区切られて対峙していた。

罵声のやりとりと交互に奇妙な歌合戦が、早朝からもう数時間もつづいていた。賛成派は、数十年前の「新島青年団の歌」を、くり返しうたった。「御国のため、大君のため我らが郷土を振興しよう」という類の古色蒼然たる歌だった。

突堤を数十メートル海中に延ばすという防衛庁の条件工事の約束、ただそれだけの擬制的な近代化プランの延長上に、幻影の楽土を構築し、幼稚な想像力をふりしぼって、お伽草紙を創作しつづけてきた賛成派幹部のまぎれもない「心の歌」だった。彼らの時代錯誤のロマンチズムは、この歌の音頭を取ることによって満たされはしたものの、賛成派のピケの主力である日当動員されてきた生活者達のリアリズムとの違和感に引きさかれて、合唱はうつろだった。

反対派の歌も劣らず、むなしかった。反対派の主力である、ピケの最前列に立つ、老婆や老爺たちは「民独」を、くり返し歌ったが、おりにふれては「開港・打出の小槌論」に反撥するのあまり「芋を喰ってもミサイル反対」と自給自足経済への回帰を主張する共同体的意識が、「民独」によって内発的に鼓舞されることなど、あり得る筈がなかった。それは、呼びかけの

歌として聞く時、あざやかに意味を持った。「決起せよ、祖国の労働者」……。

第三次オルグ団は、愛青連や右翼に阻まれて「スクラムを組むでなし、歌をうたうでなし、まったくソシキロウドウシャも気細いよう。おらが若いころ前浜にブチ上ったゴンドウ鯨の群のように」波しぶきがあがる突堤の先端に、戦闘集団としては解体してしまったように、ただかたまっていた。島にいる筈の第二次オルグ団は、なかなか見つけがたかったが、老婆達のピケの背後に庇護されて、モウロク頭巾にモジリばんでんの新島風俗で、砂浜に座りこんでいる一団がそれであると、やがて教えてもらった。我が眼をうたがって、しげしげと眺めいってしまった私の耳に、哀しいシャレが、ささやかれた。「まあ、見ろって、啄木どもを……東海の小島の磯の白砂に、我泣きぬれて、テロをこわがる」

突堤のふちの岩塊に、海鳥の群れのようにむらがつて、カーキ色の制服と白カブトで「抜刀隊」などという吹き流しをひるがえし、軍歌をうたい、怒号を放っている右翼の一隊にくらべて「挑発をさける」一群は、あまりにも無気力だった。「いわお」のような硬質の援軍を前に立てる賛成派の闘志はより上り、「砂」のような、たよりない一群をかばう反対派は沈みこんでいた。「血潮には正義の血潮もて叩き出せ」……老婆たちの歌はもう悲鳴のように哀切だったが、叫喚と潮騒の中にむなく拡散していくのみであった。やがて老婆達の頭上には、子供の頭大の石が投げこまれはじめ、反対同盟の指導者には右翼がおそいかなり、混乱がまき起っ

た。

結局、反対派は数名の負傷者を出し、第三次オルグ団は「村の政治に干渉しない」「村の工事に反対しない」等、つまり「何もしいない」も同然の一札を賛成派に入れることによって、四時間にわたる突堤の釘づけから釈放された。

その後、私はただちに状況をつかむべく行動した。反対運動の当面の戦術的課題は、ミサイル試射場に至る道路工事の着工を阻止するにあった。防衛庁から村当局が請負った工事なので村議会を開いて決めなければならぬ。この村議会開催を阻止する、これが目標だ。オルグ団の任務もそこにあった。だが、すべては右翼の陽動作戦にふりまわされ、黒根港上陸作戦に眼が向いてしまっている。オルグ団の指導部にこの傾向が特にある。つまりオルグ団を無事に上陸させたり、引きあげさせたりするというのが、完全に自己目的化してしまっている。「オルグ団は何しに来たのか」「我々は何のためにオルグ団をむかえいているのか」という単純なことすら右翼のもたらすパニックによって見失われている。照準を本来の政治的目標「村議会開催阻止」にもどして正確に合わせる。これが第一にやるべきことだ。

右翼がいることによって、反対派にきわめて有利な政治的情勢が生れた。彼らの暴力沙汰によって「反ファシズム」の旗で、いっそう反対派を団結させ、中立をひきよせ、賛成派を動揺させ、その中の強硬派を孤立させる条件が生れた、心ならずも賛成派か、もしくは中立を表明

するほかない立場（これは村内の経済的支配力を賛成派が握っているもので以外に多い。また、シュウトは賛成派、夫は反対派という場合の嫁の立場など）は村内に暴力事件を激発し、小型のファシズムを導入してまで、受け入れようとするミサイルへの疑問と不安を、ここで公然と表明し、一家内で言えばシュウトを孤立させうる変化が全村的に成長しているのだ。賛成派幹部内にも幾すじもの亀裂が走った。夜学の帰り、酒に酔った右翼にふざけかけられた女高生の二人は、賛成派幹部の娘だった。良識派が右翼導入を反対すると「おまえらから血祭りに」とおどされた。これらもまた、村議会を開けない要因となっている。この状況を正確に運用する政治指導、これが第二にやることだ。

第一と第二を結合した「村議会開くな、反ファシヨ」のデモと集会が計画された。

右翼のほしいままな横行のもとで、決闘前の西部の町のように、道を歩くものすら絶えたような状況の中で、家々に孤立して抑圧されている怒りを噴出させる必要があった。「指導部が右翼にぶるって、第三次オルグ団が来て、人数がふえてからやる」と徒らに延ばされて来た。そして今日、二月五日の闘争の意義は、第三次オルグ団を断乎上陸させるにとどまらず、ただちに村内のデモと集会を敢行し、敵を制圧するにあったのだ。しかし、「何もしない」一札を強奪された悄然たる上陸ですべてはまた流されてしまった。

……その夜から、また平均風速二〇メートルの季節風が、ほげたへの平手打ちのように、

家々の戸を叩いた。その風は、砂つぶてと共に右翼本部の放送する愛国行進曲や軍艦マーチを露路や窓に吹きつけた。

今日、猟銃を肩にして頭領の如くのりこんで来た、清水亘をむかえて賛成派は決起大会をひらき勝ちどきをあげた。

反対同盟本部に、憤怒で家に座っていられない老爺や若いしゅが続々集まってきた。彼らはフトコロにカナテコをしまったり、棒をかくし持ったり、それぞれ自衛の武器をたずさえて、闇にまぎれて道路上の右翼の誰何やピケを突破してやって来た。老婆達が深刻に動揺している話を聞いた。

……この島で擬似的な前衛の役割をになわされている共同体的エネルギーの体現者達。かつて、私は彼女らの土着のエネルギーにコンミュニンの幻を投影しては、ひそかに胸おどらせたこともあった。

去年の夏の山の道路のピケには警視庁機動隊を相手どって、果敢に奔放に民話的な行動者としてたたかい、しりぞくことをしなかった彼女ら、平均年齢六〇歳の不敗のピケ隊員達。

予定地の測量を阻むため、測量隊員の傍らへ、ちょこんと出現し測量用具にうっとり見とれて「キカイモンは便利だなあ、まあ、ちょっくら、ウンバアに見せてきいろよ」とさも珍らしげに手にとってみて、隊員達が、前近代への憐憫についさそいこまれたそのすきに、用具をか

かえて若い鴉の如く山中へ飛び立ち、永年の仕事場である草むらの中へ没してしまい彼らを止むなく下山せしめた、その機知と敏捷さ。機動隊の小面憎い隊長に、よろけたふりをして、どんと体当りし、深い穴の中へ叩きこみ「アーラごめんなさい」と江戸弁で謝って逃げたという勇氣とシャレ。「若い頃は炭を五俵もしよって、この山を上ったり下りたりしたおらだ。おめえらに負けるもんだか、さあこい」と機動隊の突進の前に立ちはだかり、一人を組み伏せ、五人をかきむしったという、労働しぬいて来たものの持つ我むしゃらな力と自信。道路の仮処分に來た執行吏の、能面のような表情をつきくずし「人間の顔を引きずり出す」ために、さんざん奇妙な舞踏をつづけ、ついに爆笑させることに成功し、その日の執行を断念せしめた苦勞人の才氣。万策つきたおりには、一せいに腰巻をまくり上げ旗のように打ち振って撃退したという「天のウズメ」の末裔たち、たたかいが生んだ数々の伝説の中の山姥のような共同体のバルチザン達。

……彼女らが嶋中事件以後動揺しはじめ、五日の黒根のピケ以後、さらに戦慄しているという……。

機動隊とたたかったピケでは「ごぼう抜き」に幾たびされても藪へかくれ、沢へ飛び、木の間伝いにまたピケの戦列へまいもどり、しつようにたたかった彼女らは、ラジオで聞き、テレビやニュース映画で見た「ごぼう抜き」に自分がされた時「おまわりさん、これがごぼう抜き

だかよ、うーんうん」と感心しつつ引っこ抜かれていき底抜けに楽天的だった。「全学連と新島のウンバアらだけじゃ、土性骨があるのは……おらはババトロツキストだ」と、昂然として打ち身を撫でさすり、ひるむことを知らなかった。

彼女らは「視聴覚教育」で闘争に必要な知識を身につけた。まる三年も、オルグ達のスライド・映画・演劇をくい入るように見つめ、ラジオのニュースをむさぼり聞いた。「うどんにするとツーツーする音で、晚めしの時のニュースが聞けないから、このごろはメシにした」という家がのきなみだった。彼女らは視聴覚文化の貪欲きわまりない受け手となったが、かねがね独特な受け手でもあった。

この島の映画の小屋では、しばしば画面にすっかり感情を移入してしまった老婆達が、フィルムの中で生活してしまう。チャンバラなどでは「ホラ、うしろを気をつけろ、左を見ろってば、今斬れってば」というたぐいの注意が主人公に発せられるし、恋愛映画では、芸者などによろめく主人公は忠告をうける。「わりい女だから気をつけろって、女房子供もあるくせにちっとは考えろ、家をばくらやみにしておめえはそれでいいだか」……心ならずも恋人と別れた女主人公は「ヤイ、一生泣くだぞ、おめえは、なぜ、きもをいらせるだよ、ほれ、すぐ追っかけてもう一回話し合ってみろってば」と、さとされる。

一昨年、フルシチーフの全面軍縮の国連提案をラジオで聞くため、私と居合わせた三人の老

婆達は「そうだ、そうだ全くだあ、フルシチ・フさんえ。新島のウンバアらもみんなおめえと一つ考えだつてばよ」と、ラジオと対話したのだった。かねがねラジオを人格化して「このごろ、ラジオ代をはらわないもんだから意地をまげて、俺の家のラジオは天気予報にちゃらんぼらんを言う」となげいたりしていた。

この視聴覚文化の享受者たちの純な「受け方」はきわめて美しい。私は愛惜して止まない。しかし美しさの影の部分指さして言わなければならない。

つい数日前まで竹槍をふるってインデアンのような奇声をあげ、老婆達をおどしていた愛国党の小森一孝が、東京へ帰るやいなや嶋中家をおそい、女中を刺殺したことは老婆達を衝撃した。「えらくなくとも、関係なくとも殺されるだから、おらもきつとやられる」……活字文化による抽象化にうとく論理構造が単純な視聴覚的思考(?)の老婆達は、ラジオで聞いた時、小森の兇刃を脾腹に冷たく感覚してしまったのだ。

五日のピケには、三池のピケで殺された、久保さんをも想起しつつ、朝から夕刻まで「殺し屋」たちの傍若無人な跳梁の中で「死」を眼前に戦慄しつつけたのだ。

……この老婆達を責めることはできない。笑うことも、哀しむこともできない。日本帝国主義のミサイル武装に反対する闘争の最前列に、右翼テロルの荒れくるうピケの前衛に、六十歳、七十歳の老婆達を配置している恐るべき運動の退廃に心からの憤怒を私は覚えた。確かに、飛